ウィルあいち交流ネット通信

(公財)あいち男女共同参画財団

第85号
2016.2

「東日本大震災から学ぶこと」

東日本大震災から早いもので5年の年月が過ぎようとしています。早いと感じるのは、傍観者でしかない自分と、5年の間何も出来なかった自分の歯がゆさの両方があるからです。被災者の方々にとっては、長く厳しい5年であり、多くの残された問題があると思います。現に仮設住宅で暮らさなければならない方もたくさんいらっしゃるのですから…

昨年の11月のことになりますが、私の住む飛島村で愛知県に移住されている被災者の方々（大人16人子供13人）を招いて餅つきをしました。私はお手伝いで参加しました。前日から、当日持ち帰ってもらう、のしもちやほうれん草（作られている農家さんの寄付）の用意、当日の食事の下ごしらえ等、有志の人たちで準備されていきましたが、どの方も喜んで働いてみえ、感心するばかりでした。震災の年には、飛島村からお米を被災者の方々に送ったことは新聞記事にもなり、知っていましたが、その後も、支援を続けていることは知らずにいました。どんなかたちであっても、支援し続けているところは少ないようです。

飛島村は昭和34年の伊勢湾台風で甚大な被害を受けています。私の生まれる前のことで、私は水害を逃れ避難したような経験などないわけですが、その時、いろいろな人にお世話になったから、今そのお返しを少しでも出来たらとの思いでいることを、餅つきの責任者は話されました。その話から辛かった記憶より、人の心のありがたさを恩として人と人がつながっていくのかなあと思いました。交流会では、今はまだ仮住まいのため、家を探しているという方も何人かみえ、「飛島には津波は来ない？」と聞かれた時、「この地域は海抜0m以下ですし、海にも近いので津波が来ないとは言いきれないけれど、今、字ごとに避難所が造られています。」と答えながら、年月は過ぎても、目の当たりにした恐怖を忘れることはできない、二度と同じ苦しみは味わいたくないという本音と前を向いて進んで行こうという本気の二つの気持ちを感じました。

復興とは建物、産業、交通、家庭生活・環境等を整えていくことに始まるのですが、そこを繋ぐのは、やはり人なのでしょう。東日本大震災が日本に出した宿題はとてもとても大きいものです。答えはまだまだ出ないでしょうが、その答えをもとめ、日々生活していけたらと、私自身の生活を反省しつつ思ったしだいです　　Fem'09　佐野裕香子

ウィルあいち交流ネット参加グループ

- さわらび会
- *メンズリブ名古屋
- *ア・コール
- *女性学”98の会
- *ＩＰＡ
- *メディアの会かたつむり
- *ウィル１０
- *Ａ・Ｂ・Ｃ-Ｎｅｔ
- *Ｃ・Ｃ・Ｃ
- *グループ・キートス
- *クラリネット”９９
- *２０００女性学の会
- *ウィル２０００
- *Ｉ．Ｗ．Ｌ
- *ウィル・ミニ・ボックス
- *ウィルＤｏ2002
- *平成いちご会
- *きらら2005
- *サーティネット‘０５
- *ベリーズ18
- *Ｓｔｅｐ０７
- *トライアングル‘０８
- *まちづくりファシリテーター勉強会
- *Fem.'０９
- *Amelie’10
- *なでしこAICHI
- *きらり24
- *ＡＩＣ25
- *ウィルウィル14

ウィルあいち交流ネットとは…

ウィルあいちセミナー等の受講修了生による自主活動グループで組織された団体です。

共同参画　NATOでの勤務（9）

「現代の紛争では、兵士であるよりも女性である方が危険である」－10月国連本部で開催された国連安保理決議第1325号に係る会合でのバーシュボウNATO事務次長の言葉。

決議第1325号「女性・平和・安全保障」決議は、紛争地での性的暴力の問題に対して国際社会の注意を喚起し、対策を迫る契機になりました。また、女性を紛争の犠牲者として保護の対象と見なすだけではなく、女性が平和の創造者として積極的に平和維持・構築の過程に参加できる社会を目指しています。さて今回は、NATOの活動における「ジェンダー視点の反映」について紹介します。「ジェンダー視点」とは？その前に「安全保障とジェンダー」について考えてみましょう。人間の安全保障の観点から考える時、紛争のリスクは男性・女性それぞれに異なると言われます。例えば、男性には戦闘員として動員され死傷するリスクがより高く、女性には性的暴力・搾取や貧困のリスク等がより高いというように、当該社会において求められる役割等に基づき、異なる脆弱性が指摘されています。これは、安全保障を達成するためのニーズがジェンダーにより異なるということでもあります。冒頭で引用したとおり、紛争地では一般に女性がより脆弱で、したがって女性に対してはまず性的暴力等からの保護、そして平和プロセスへの参加につながるエンパワーメント等が求められています。また、男性には男性のニーズに応じたサポートが必要です。例えば、男性は戦闘員になる機会がより多いため、紛争後は武装解除や社会復帰に関するニーズがより大きいと言えるでしょう。ここで有効なのが「ジェンダー視点」。これは「ジェンダーレンズ」と例えられることもあります。つまり、紛争地で安全保障の改善のためにサポートする側は、前述のようなジェンダーに関する知識が不可欠で、かつこのレンズを通して事象を見ることで、より的確な活動ができるということです。しかもこれは知識と着意さえあれば、簡単に装着できる便利な物なのです。ここで強調したいのは、これを「女性の視点」と考えてはならないこと。「ジェンダー」は女性だけの課題ではありませんし、安全保障上は男性にもリスクがあるのは前述のとおりです。何より「ジェンダー視点」は男性も女性も簡単に使えるツール。NATOはこれらを踏まえ、本部レベルの1325号履行に係る「政策」及び「行動計画」の他、隷下の戦略コマンドレベルにおいても「NATOコマンド組織への1325号とジェンダー視点の統合（BI-SC Directive 40-1）」という指示文書を整備し、NATOの全活動における「ジェンダー視点の反映」を推進しています。一般に軍事作戦では、情勢分析、計画の策定、実行等のプロセスが求められますが、NATOではこれら全てにジェンダー視点を反映させるため、具体的な手順や要領を逐次整備しています。理念を履行につなげるNATOの実効的な取組みは多国間枠組みの知恵。多くの加盟国や関係国がこの分野でNATOから学ぼうとしています。

内閣府男女共同参画局　共同参画より

ＮＡＴＯ事務総長特別代表（女性、平和、安全保障担当）　補佐官　栗田千寿

［編集後記］

2月3日節分です。節分と言えば豆まき！

皆さん豆まきをしましたか。我が家は少しだけ豆まきをしました。　S.I

編集発行：ウィルあいち交流ネット

編集協力：(公財)あいち男女共同参画財団